



A4用紙で印刷すると、実寸サイズがご確認いただけます。  
※倍率100%の場合

# 目次

父	5
竹青 <small>ちくせい</small>	29
冬の花火	57
女生徒	119

# 父

イサク、父アブラハムに語りて、  
父よ、と曰ふ。

彼、答へて、

子よ、われ此にあり、

といひければ、

— 創世記二十二ノ七

義のために、わが子を犠牲にするという事は、人類がはじまって、すぐその直後に起つた。信仰の祖といわれているアブラハムが、その信仰の義のために、わが子を殺そうとした事は、旧約の創世記に録されていて有名である。

エホバ、アブラハムを試みんとて、

アブラハムよ、

と呼びたまふ。

アブラハム答へていふ、

われここにあり。

エホバ言ひたまひけるは、

汝の愛する独子、すなはちイサクを携へ行き、かしこの山の頂きに於て、イサクを燔祭として献ぐべし。

アブラハム、朝つとに起きて、その驢馬に鞍を置き、愛するひとりごいサクを乗せ、神のおのれに示したまへる山の麓にいたり、イサクを驢馬よりおろし、すなはち燔祭の柴薪をイサクに背負はせ、われはその手に火と刀を執りて、二人ともに山をのぼれり。

イサク、父アブラハムに語りて、

父よ、

と言ふ。

彼、こたへて、

子よ、われここにあり、

といひければ、

イサクすなはち父に言ふ、

火と柴薪たきぎは有り、されど、いけにへの小羊は何処いずこにあるや。

アブラハム、言ひけるは、

子よ、神みづから、いけにへの小羊を備へたまはん。

斯くして二人ともに進みゆきて、遂に山のいただきに到れり。

アブラハム、壇を築き、柴薪をならべ、その子イサクを縛りて、之これを壇の柴薪の上に置せたり。

すなはち、アブラハム、手を伸べ、刀を執りて、その子を殺さんとす。

時に、エホバの使者、天より彼を呼びて、

アブラハムよ、

アブラハムよ、

と言へり。

彼言ふ、

われ、ここにあり。

使者の言ひけるは、

汝の手を童子より放て、

何をも彼に為すべからず、

汝はそのひとりごをも、わがために惜まざれば、われいま汝が神を畏るるを知る。

云々というような事で、イサクはどうやら父に殺されずにすんだのであるが、しかし、アブラハムは、信仰の義者たる事を示さんとして躊躇せず、愛する一人息子を殺そうとしたのである。

洋の東西を問わず、また信仰の対象の何たるかを問わず、義の世界は、哀し

いものである。

佐倉宗吾郎一代記という活動写真を見たのは、私の七つか八つの頃の事であったが、私はその活動写真のうちの、宗吾郎の幽霊が悪代官をくるしめる場面と、それからもう一つ、雪の日の子わかれの場を、いまでも忘れずにいる。

宗吾郎が、いよいよ直訴を決意して、雪の日に旅立つ。わが家の格子窓から、子供らが顔を出して、別れを惜しむ。とときまえのう、と口々に泣いて父を呼ぶ。宗吾郎は、笠で自分の顔を覆うて、渡し舟に乗る。降りしきる雪は、吹雪のようである。

七つ八つの私は、それを見て涙を流したのであるが、しかし、それは泣き叫ぶ子供に同情したからではなかった。義のために子供を捨てる宗吾郎のつらさを思つて、たまらなくなつたからであつた。

そうして、それ以来、私には、宗吾郎が忘れられなくなつたのである。自分がこれから生き伸びて行くうちに、必ずあの宗吾郎の子別れの場のような、つらくてかなわなない思いをする事が、二度か三度あるに違いないという予感がした。

私のこれまでの四十年ちかい生涯に於いて、幸福の予感ほ、たいていはずれるのが仕来りになつていけるけれども、不吉の予感ほことごとく当つた。子わかれの場も、二度か三度、どころではなく、この数年間に、ほとんど一日置きくらしいに、実にひんぱんに演ぜられて来ているのである。

私さえいなかつたら、すくなくとも私の周囲の者たちが、平安に、落ちつくようになるのではあるまいか。私はことし既に三十九歳になるのであるが、私のこれまでの文筆に依つて得た収入の全部は、私ひとりの遊びのために浪費して来たと言つても、敢えて過言ではないのである。しかも、その遊びというのは、自分にとって、地獄の痛苦のヤケ酒と、いやなおそろしい鬼女とのつかみ合いの形に似たる浮気であつて、私自身、何のたのしいところも無いのである。また、そのような私の遊びの相手になつて、私の饗応を受ける知人たちも、た